

# 登龍門通信

博士課程教育リーディングプログラム（オールラウンド型）

No. 5 / July 28th, 2016

## 第3期生、アジア春研修へ

### ラオス研修

2016年春の海外研修の訪問先はラオスとモンゴルとなり、登龍門第3期履修生14名が参加したラオス研修は2016年3月2日（水）から3月11日（金）まで実施されました。第3期履修生にとっては、10月のモンゴル初年次研修に続く2度目の海外研修です。そのため、経済発展の著しいASEANの中にあって、小国で内陸国でもあるラオスの現状と将来をより深く掘り下げるように、「ラオスの経済発展を考える」を研修テーマとしました。具体的には、3グループに分かれた各グループにラオス人学生が2名ずつ加わり、①ASEAN経済統合深化によるラオスへの影響、②対外直接投資の流入によるラオスへの影響、③進出日系企業から見たラオス経済政策、といったサブテーマをグループごとに選択し、事前学習、現地研修を通して調査・検討を行い、経済発展のための提言を取りまとめました。

現地での研修は、初日のラオス人学生との初顔合わせでもあるオリエンテーションと角谷快彦特任准教授発案のアイスブレイクを兼ねた「Economic Game」から始まり、ラオス日本センターの紹介とラオスの経済概況、ラオスにおける不発弾問題、といったラオスをより深く知るための講義や海外からラオスに進出した企業や経済特区への訪問、それにグループでの議論を加え、講義・見学・グループワークの三本立ての内容で実施されました。

研修の中盤で、ベトナム、ラオス、タイ、ミャンマーをつなぐASEAN東西回廊のラオスでの拠点となるサバナケットへ飛行機を使って1泊2日で訪問しました。サバナケットでは、経済特区Savan Park事務所、特区内にある日系の化粧品



PROFESSIONAL

Gateway to Success in Frontier Asia





およびプラスチック製玩具の製造企業K.P. Beau Lao社、タイにあるトヨタ自動車の組み立て工場向けの自動車のシートカバーを製造する豊田紡織ラオス社を訪問し、実際に企業誘致、企業経営を行っている当事者から生の声を聞くことができました。特に後の2社の社長には、現地での夕食会にも別途お声をかけたJICA 専門家夫妻とともに参加していただき、履修生にとっては普段なかなか聞くことのできない貴重なお話を伺う機会となりました。このことはビエンチャンで訪問した、タイ資本のスーパーマーケット Rimping Supermarket、安全靴の製造企業 Lao Midori Safety Shoes社を訪問した際にも言えることで、実際に現場を訪れ、自分の目で見て、当事者の生の声を直接聞くことは、将来実社会で活躍する登龍門履修生にとってはとても重要なことです。

研修の後半では、それまでの検討結果と最後の提言に向けた方向性についての中間発表を行い、その場にはラオス人実業家2名も参加して、ラオスで実際に事業を行っている者としての視点からコメントをいただきました。

そしていよいよ迎えた最終発表会では、ラオス日本センター鈴木康次郎チーフアドバイザー、同Somchay Phetlamphanh副所長、それに、滞在途中で急遽お話を伺う機会を得た農業省JICA 専門家瀬尾 充氏をゲストとしてお迎えして、グループごとの発表を行いました。発表内容は、中間発表時から著しい進歩が見られ、どのグループもわかりやすく筋が通り、かつよく検討が行われているのが感じられ、同行していた教員も安心しました。

今回のラオス研修では、履修生が研修に意欲的に取り組んだのが印象的でした。訪問先では毎回制限時間を上回るほどの質問があり、グループワークでも積極的に教員



へ質問や相談を行いました。さらに、各グループ内で活発な議論が繰り広げられ、意見の対立もありながら、それらを乗り越えて最終発表に至りました。研修全体を通して履修生は、ラオスについての知識を広めたのみならず、ASEANの経済動向、国家レベルの経済発展、産業開発、企業の海外進出、人事管理、等々、多くのことを学びました。さらに、活発な議論が行われたグループワークや、出発前、中間、最終と3度のプレゼンテーションを通して、コミュニケーション能力、ディベート力、自己表現能力、説得力など、知見を広めただけでなく多くの能力が身についたと思われます。

(勝田幸秀)



## モンゴル研修

モンゴルの首都ウランバートルでは、冬期間、石炭燃焼を主な原因とする大気汚染が深刻となっています。そこで「ウランバートル大気汚染の調査と提言」をテーマとするモンゴル研修を2016年2月27日(土)から3月7日(月)で行い、9名の履修生(2期生2名、3期生7名)が参加しました。今年で3年目となります。

研修前半では、積雪試料を分析し大気汚染物質を特定しました。雪は大気中の汚染物質を取り込んでいるので、元素やイオンを分析し汚染を定量的に議論できます。研修後半では、発電所や気象環境モニタリングセンターなどを訪問し、モンゴルにおける大気汚染対策の現状を見学しました。研修の最後には、研修を通して得た内容に基づき環境問題解決への提言を行いました。

研修実施にあたり、名古屋大学環境学研究所、博物館(フィールドリサーチセンター)、モンゴル科学技術大学から全面的な協力を毎年得ています。ここに謝意を表します。

### ● 野外調査と試料調整

2月28日、モンゴル科学技術大学で研修開講式を行いました。趣旨説明などの後、登龍門履修生2~3名とモンゴル人学生2名が1つのグループとなり、4グループに



分かれ調査地域の選択を行いました。式終了後、1時間かけ市内中心部から約50km南のマンズシレーで、現地調査法の指導を受けました。

2月29日、調査地域分担に従い、ウランバートル市内で各グループ15前後の地点で雪試料の採取を行いました。

3月1日、フィールドリサーチセンターの協力と指導のもと、試料を液体と固体粒子に分離しました。液体は、化学分析に、固体粒子は電子顕微鏡観察に使用しました。

同日夕方、KR社のガンバット・バイスガラン代表取締役社長と藤田智也取締役役にご講義いただきました。同社はモンゴルへの進出サポートや人材育成・紹介をはじめ、日本とモンゴルをつなぐ幅広いサービスを提供しています。同年代の起業家による講義内容に、登龍門履修生のみならずモンゴル人学生も興味を持ち質問が続きました。

### ● 機器分析と関係機関訪問

3月2日、分析と見学グループに分けられました。2つのグループは、フィールドリサーチセンターで化学分析を行いました。残る2つのグループは、気象環境モニタリングセンターと大気汚染対策を施したス







トープの開発現場を見学しました。

3月3日、分析と見学が入れ替わります。前日見学だった2つのグループは、フィールドリサーチセンターで試料の分析を行いました。前日の分析グループは見学にまわります。この日の見学グループの1つは、地中熱施設の見学です。地中熱を利用した温室では、厳寒のこの時期にほうれん草が実っていました。さらにそこから約1時間かけ、ゾーモッド第4学校に設置された地中熱施設を見学しました。もう1つのグループは、ウランバートルから南東約75kmにあるサルヒット風力発電所を訪問しました。室内で風力発電の優位性の説明を受け、再生可能エネルギーへの理解を深めました。昼食後、寒風吹きすさぶ丘陵地におもむき、31基の風力発電プラントでプロペラが力強く回っているのを見ることができました。

3月4日、朝から降雪です。全員で第4火力発電所見学です。石炭の貯炭場、制御室、タービンの3カ所を見学しました。貯炭場では貨車を反転して石炭を落とし込むところを見せていただきました。発電所見学後、市内中心に戻り、JICAモンゴル事務所を訪問しました。JICAの環境対策プロジェクトの説明を受け、支援事業の仕組みや各国の支援の取り組みの違いなどを知ることができました。

科学技術大学に移動し、フィールドリサーチセンター苗村特任助教から化学分析結果の解析法と最終発表の留意点についてご指導いただきました。

### ● 取りまとめと成果発表

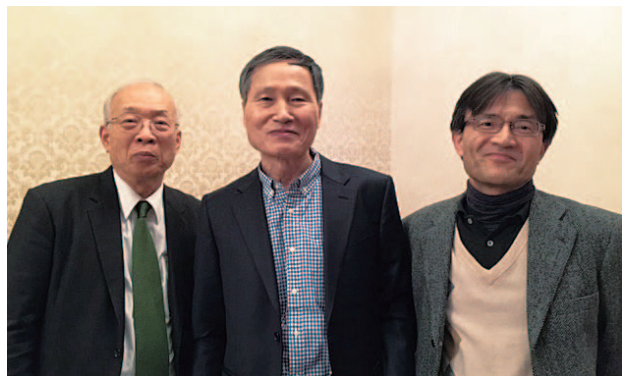
3月5日、朝からモンゴル・日本人材開発センターで取りまとめ作業です。各グループとも直ちに発表内容のフレームづくりを始めました。ポストイットを駆使して、登龍門の教育プログラムの1つである

プロフェッショナル・ディベロップメントで修得したスキルを積極的に活用していました。午後に各グループが、タイトルと発表の構成を中心に中間発表を行いました。活動を見ておられたモンゴル科学技術大学 Baasandash Choijl 副学長からは、取りまとめに向け激励がありました。17時以降は、ホテルの会議室を使い、引き続き取りまとめ作業を行いました。

3月6日、前日同様モンゴル・日本人材開発センターで取りまとめ作業です。昼食後、成果発表会です。分析結果については、3年間のデータをまとめたグループ、自分たちの調査だけのデータでまとめたグループなどさまざまです。環境問題解決への提言では、短期的には煙突にフィルターをつけたストーブの普及、長期的には首都機能と経済活動の機能を分離する国土開発の案など、これもさまざまでした。なお、この成果報告内容は報告書として後日モンゴル関係機関にも送付しましたので、モンゴル国内の行政への反映が期待できます。

発表質疑の後、講評を長谷川好規・医学系研究科教授と Baasandash 副学長それに KOICA（韓国国際協力機構）専門家の Chung Heuk jin 氏からいただきました。研修参加修了証の授与と集合写真の撮影を行い、研修行事終了です。

（高橋裕平）



写真左より、  
城所卓雄・博物館特任教授（前モンゴル大使）  
Chung Heuk jin・KOICA 専門家  
長谷川好規・医学系研究科教授



## 東京研修

2016年5月13日(金)に、履修生28名(2期生9名、3期生19名)が東京研修を行いました。この研修では、在日オーストラリア大使館と日本アイ・ビー・エム株式会社を訪問し、そこで活躍されている方々の生の声を現場で聞くことができました。

まず、午前中に在日オーストラリア大使館を訪れました。大使館では、普段あまりうかがい知ることができない大使館業務について説明を受けた後、オーストラリアの外交戦略を政治、経済、そして教育について、実際の大使館担当者から講演していただきました。短い時間ながらもその内容は刺激的で、訪問終了の時間となっても履修生からの質問は尽きることはありませんでした。最後にBruce Miller駐日オーストラリア大使も顔を出してくださり、大使館の美しい庭での記念撮影をもって、大使館での研修を終了しました。

続いて午後は、日本アイ・ビー・エム株式会社箱崎本社を訪問しました。最初に橋本孝之副会長により登龍門履修生に対する期待のお言葉をいただいた後、アイ・ビー・エムがリードする次世代技術であるコグニティブ・コンピューティング・システム「Watson」や自動車の自動運転技術開発のお話を聞きました。また、「Pepper

くん」のお迎えで始まった日本アイ・ビー・エム本社内の見学ツアーでは、コグニティブ・コンピューティングの概念を示す展示などによりアイ・ビー・エムが考える「未来」をうかがい知ることが出来た一方、アイ・ビー・エムの歴代の製品展示では、かつて研究室に常備されていた製品を前に同行の教授2名が勝手に盛り上がっていました。またサイバー攻撃を世界的規模で監視するセキュリティー・オペレーション・センターも見学し、大学とは違う雰囲気を肌で感じることができました。

その後、橋本副会長のご厚意によりアークヒルズクラブにご招待いただき、そこで意見交換会になりました。交換会には日本アイ・ビー・エムの名大OBも参加してくださり、素晴らしい東京の夜景を眼下に見ながら、リラックスした雰囲気の中、多種多様な話題で交流を深めました。

とても1日で終わらせるのはもったいないほど、履修生には大変実りのある研修だったと思います。多くの履修生たちが大いに刺激を受け、将来のビジョンをより明確にしたことでしょう。移動中や帰路に自らのキャリアプランについて語り合っていたことが印象的でした。

(田代寛之)



日本アイ・ビー・エム株式会社  
橋本孝之副会長



Bruce Miller 駐日オーストラリア大使との記念撮影



## 火力発電所、工場の見学

2015年3月24日(木)に、14名の履修生(1期生2名、2期生2名、3期生10名)が中部電力株式会社の碧南石炭火力発電所、3月28日(月)に13名の履修生(1期生2名、2期生2名、3期生9名)が株式会社東海メディカルプロダクツの土岐工場・春日井工場を見学しました。

### ● 中部電力株式会社 碧南石炭火力発電所

碧南石炭火力発電所では、まず所内の研修センターで碧南火力発電所の規模・特徴・発電プロセスの説明を受けた後、屋外の広大な貯炭場を見学し、その後、2グループに分かれて室内見学をしました。見学に参加した3期生の約半数は、3月上旬にモンゴル・ウランバートルの石炭火力発電所を見学した後だったので、中部電力の最新の石炭火力発電所とモンゴルの従来型石炭火力発電所の違い、特に環境対策に大きな違いがあることを実感していました。

見学後の質問タイムでは、「発電所の耐久年数」、「環境対策」、「石炭の品質と発電効率」、「防災対策」、「電力の自由化」、「従業員の勤務体系」など、履修生からのさまざまな質問に対して、中部電力株式会社川口文夫顧問、碧南火力発電所渡部哲也所長、碧南火力発電所浅田清智業務課長から丁寧な説明があり、石炭火力発電所への理



中部電力株式会社  
川口文夫顧問



株式会社東海メディカルプロダクツ  
筒井宜政会長

解が深まりました。

### ● 株式会社東海メディカルプロダクツ 土岐工場・春日井工場

登龍門の3期生は、2015年12月19日(土)に東海メディカルプロダクツ筒井宜政会長のトップリーダートークを聞き、大きな感銘を受けました。学生からは、筒井会長が開発したカテーテルの製造現場を見たいという要望が多く、3月28日の工場見学会が実現しました。土岐工場と春日井工場では、バルーンカテーテルの手づくり製造現場や全製品の検査過程などを詳しく見学できました。赤ちゃん用カテーテルの開発話に関連した質疑応答では、筒井会長から『利益の追求ではなく、人の命を救うことが第一』という会社の基本理念が改めて紹介されました。

工場見学の後には、名古屋市内のレストランで筒井会長ご夫妻主催の意見交換会が開かれました。意見交換会の最後に、筒井陽子様から、子供を心臓病で亡くした時の体験談とともに、『死にものぐるいで仕事をすれば、どんなことでも達成できるので、がんばってください』という温かく力強いエールが履修生達におくられました。

(足立 守)



## 第1回全国リーディングプログラム合同女子会

2016年3月26日（土）と27日（日）の2日間、第1回全国リーディングプログラム合同女子会が静岡県内のホテルにおいて開催されました。本会は、女子大学院生が抱えている悩みや不安について語り合い、共有することを目的に企画されました。全国のリーディングプログラムに所属する57名の女子学生に加え、産学官のさまざまな分野で活躍されている17名の女性プロフェッショナルの方々、さらに基調講演の登壇者として日立グループで国内初の女性執行役員となられた株式会社日立ソリューションズ常務執行役員の富永由加里氏にもご参加いただきました。

本会の開催にあたっては、PhDプロフェッショナル登龍門に所属する医学系研究科の押野玲奈さんをはじめ、名古屋大学のリーディングプログラムに所属する女子大学院生が実行委員となって、企画から準備、進行に至るまでほとんど学生の手で行われました。すべての参加者にとって有意義かつ楽しめる会にするため、秋頃から何度もミーティングが行われ、話し合いのテーマや発表形式から、物品の確認や参加者情報の管理に至るまで、緻密な計画が練られました。研究室とリーディングプログラムでの活動と並行して、このような大きな会を初めて企画するとあって、プレッ

シャーや困難もたくさんあったようですが、それだけやりがいも感じられ、各自が大きく成長できたのではないかと思います。

当日は、押野さんの開会あいさつからはじまりました。緊張でいつもより硬い表情でしたが、立派に実行委員長としての想いを参加者に伝えることができました。続いて、富永氏より「女性のリーダーシップ」をテーマに基調講演をしていただきました。富永氏自身がどのような苦難に直面し、それをどのように乗り越えてきたのかについての具体的なお話、自信と覚悟をもってチャレンジし続けようという熱いメッセージは、学生の心に深く響いたようでした。

学生と女性プロフェッショナルがグループごとに分かれて行ったワークショップでは、実行委員のファシリテーションのもと、和やかかつ自由な雰囲気でありながら、熱い議論が繰り広げられました。学生は抱えている漠然とした不安、直面している悩みや将来への希望について共有し、女性プロフェッショナルの方々からは、自身の経験を踏まえたアドバイスや違った視点からの意見を提示していただきました。どのグループでも時間いっぱいまで活発な議論が続き、最後のポスターセッションでは、どのグループもオリジナリティの光る発表を行いました。

閉会式では、学生のみならず女性プロフェッショナルの方々からも、この会でたくさんの方が得られたので、来年も是非開催してほしいという意見がたくさん聞かれました。

（田中瑛津子）



株式会社日立ソリューションズ  
富永由加里常務執行役員







名古屋大学  
NAGOYA UNIVERSITY

Message from Students

● 世界を舞台に、時代に求められるリーダーシップの構築を楽しもう



国際開発研究科 国際コミュニケーション専攻 (第2期履修生) / 李 嘉  
人間のコミュニケーションは非常に重要な情報交換システムだと考えられます。しかし、この分野の知識を社会でどう応用すべきなのか、ずっと悩んでいました。「高い専門性とそれを社会において活用する能力を兼ね備えた人材を、日本人・留学生がともに学ぶ環境を通じて養成する」というプログラム目的に惹かれ、所属専攻初の PhD プロフェッショナル登龍門履修生として入校しました。海外研修では、背景の異なる履修生とのチームワークを体験し、アジアの国々や企業が抱える問題を発見、解決の訓練を受けました。トップリーダートークを通じ、理想とするリーダー像を具体的に思い描くことが出来ました。また、多くのプレゼンテーションやコミュニケーションの機会が与えられ、発信力の向上を実感しています。情報伝達の角度から考えると、権力・権威・名声がまだ十分に足りていない若手リーダーが人に影響を与えたいなら、専門知識と経験、広い視野、強い問題意識、一貫性のある主張を上手く統合し、言葉というツールの応用を通じて伝えることにしか頼りません。登龍門はまさにこのルートを私たちに教えてくれています。今後ここで得られた経験を自分なりのリーダー像の構築に活用し、国境の枠を超え、国際社会に貢献できるプロフェッショナルになるため、更に努力していきたいと思います。

● 専門を社会で役立てるために登龍門で学んだこと、学ぶべきこと

工学研究科、機械理工学専攻 (第2期履修生) / 中本謙太

自分の研究を日本の将来のために最大限生かすにはどうしたら良いだろうか？ そう考えたときに私は、あらゆる分野の研究者と共同で研究開発に取り組むことで、今までの世界になかった新しい道具や価値観を生み出すことのできる研究者になりたいと思うようになりました。PhD プロフェッショナル登龍門では、分野も文化も異なる多種多様な履修生たちとのグループワークの機会が多く設けられています。ときには、自分の言いたいことが伝えられなかったり、相手の言っていることの真意が掴めなかったりと、分かり合えないこともありますが、我慢強く対話を続け、食い違っていた意見をみんなで1つにまとめあげるとい



るという貴重な経験を多く積むことができました。こうした活動を通じて、自分の意見を伝える能力や相手の言っていることを理解する能力が身につけてきたと感じています。しかしながら、現状のところこのプログラムを通じて学んだ能力と研究室での活動を通じて養ってきた研究能力が噛み合っていないと感じています。これからは、積極的に自身の研究を外部にアピールすると同時に他の研究を自分の研究とうまく関連付け、活かしていけるようになりたいと考えています。登龍門出身の研究者として立派に卒業できるよう3年間死力を尽くします。

登龍門通信

2016年7月28日 / 第5号

編集・発行：名古屋大学 PhD 登龍門推進室  
東山キャンパス 理学部 C 館3F 319号室  
〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
TEL : 052-789-5717  
E-mail : I0ryumon01@adm.nagoya-u.ac.jp  
<http://www.phdpro.leading.nagoya-u.ac.jp>